

としよかんだより

【下條村立図書館 157号 2022年3月15日発行】

まだ寒さの厳しい休日の公園をウォーキングしていると、親子や仲間遊ぶ姿を見かけます。自転車、スケートボード、野球、サッカー、バドミントンなど…。子どもも大人も真剣に＆笑顔で身体を動かす姿は、軽快でいきいきとして休日の幸せを少し分けてもらった気分。すれ違う人と交わすあいさつも、痛みの多い世の中だからこそ、やさしさや想いが伝わるような気がします。

花ノ木学級さんは「よみきかせ」が大すき！

下條小学校 河西静代先生インタビュー



花ノ木学級では、今 3～6年生の児童が、毎日さまざまな活動をしながらか過しています。河西先生は、学級文庫の中から絵本をほぼ毎日読みます。読み終わると、子どもたちは必ず「見せて！」と本に集まってきます😊

今年度、小学校で花ノ木学級の担任を務めていらっしゃる河西静代先生は、20年ほど前にも下條小学校に在籍され、読書教育に力を入れていました。当時、村の図書館を使った「学級文庫の貸出」開始、「のはらうたの会」立ち上げ、図書館で研修を行うなど、子どもの読

書活動充実のため、開館間もない村図書館に深くかわり最大限活用し育てていただきました。

再び下條小学校に赴任され、今年度は花ノ木学級の担任として、子どもたちに絵本や紙芝居を読んだり、パネルシアターを演じるなど、お話の楽しさを伝えています。3月4日、河西先生に「子どもと本と読書」についてお話をうかがいました。(以下、河西静代先生のお話)

図書館があるってすてき！

村の図書館が開館して間もない頃、利用させてもらいました。「本を読む」ことって、「本を選ぶ」ことから始めるでしょう。少ない本の中から選ぶより、さまざまなジャンルの本がたくさんある中から選んだ方がいいですから、村に図書館があることは、うれしいことですね。

小学校での読書教育活動

下條小学校以外の学校でも、保護者による読み聞かせボランティアを立ち上げ、今もその活動が続いていると聞くと嬉しいです。赴任した学校では図書館の担当を任せられて、「本を読むと楽しいよ」と子どもたちに伝えたくて、ずっと楽しみながらやってきました。



先生が絵本を読み終わると、自分で声に出して読んだり、読みあったりして楽しむ子どもたち。

【もくじ】

1～2p 河西静代先生インタビュー
3p ブックスタート 20周年
4p 新刊ぴっくあっぷ

次ページに続く

本が好きになった子ども時代

小さい頃、親に本を読んでもらった記憶はないのですが、父が本好きで部屋に歴史の本がいっぱいあったのを手に取り、挿絵を見てどんなことが書いてあるんだろうと想像していました。通っていた小学校の図書館は蔵書が少ない小さな図書館でしたが、3年生になったら借りられるのが楽しみで、借りてきた本はその日に読んじゃうんです。母の「ご飯だよ」の声も聞こえないほど、本の世界に入り込んでいました。高学年のときに、ケストナーの『点子ちゃんとアントン』『ふたりのロッテ』と『ぶ教室』などに会い、夢中になって読みました。ケストナーの人生観から人として大切なことを教えてもらったし、「いい本に出会えた」と心から思いました。それからずっと、本に育てられてきました。

子育てのなかでの読書

自分の子育てのころには、親子で図書館に行き、子どもに本を読んでもらったり、大きくなって同じ本を読んだりできることが、とても新鮮で楽しかった。当時、上郷図書館にいらした下沢洋子先生からいろいろ教えていただき、東京子ども図書館のリスト『私たちの選んだ子どもの本』などを参考に、子どもに読み聞かせをしました。

長男が6年生の時に『二年間の休暇』(ベルヌ作/福音館書店)を読み終えたときのこと。「すごく感動した!」と言ったから「どこに感動したの?」と聞くと、「それは、読んだ人にしかわからない感動なんだよ」と言ったんです! 本当にそうだなと思いました。

次男は中学2年の時、伊坂幸太郎『チルドレン』(講談社)を読んで気に入って私にも勧めてくれました。読んだら本当に面白かった。子どもと同じ本が読める幸せ、本で共通の話ができる幸せを感じました。

子ども時代に本にたくさん出あうと、ずっと本に関わっていける。そんな人生って心の豊かさにつながり、豊かな生き方ができるのではと思います。

今の時代に思うこと

YouTubeは、見るとおもしろいけれど心には残っていかない。ネットのニュースは、見たジャンルと同じ内容が上がってきて、誘導されてまた見る。気を付けないと、知らないうちに嘘の情報に踊らされて信じ込んでいる人もいて、怖いと思います。その点、本は自分で選べるし、あおられることなく自分のペースで読んで、心に落とすことができる。小さな子どもでも大人でも、本を読んでいる人は話す言葉や感性がとても素敵で、友だちになりたいと思う。本から学んだ研ぎ澄まされた感性を、分けてくれてるように思うんです。

赤ちゃんにとっての絵本・ことば

今、1歳半の孫が遠くに住んでいるんですが、パパやママが絵本を毎日読んであげているみたいで「本読むよ」って言うと本棚から自分の読んでもらいたい絵本を持ってきてパパかママのおひざに入る。1歳の赤ちゃんなりに自分の読んでもらいたい本の大きさ・色・形状をわかっていて、自分で選んでいる。この「自分で選ぶ力」が、とても大事だと思うんです。生きていくことって、自分で選んでいくことだから。まだ片言しか話せないけど、母親が話したことはちゃんと全部わかっていて、行動で表現する孫を見てると、「今までかけてもらった言葉、読んでもらった言葉が全部体に入っているんだな」と思います。だから「赤ちゃんに絵本を読んでもらえることって、すごく大事な事なんだな」って再認識しました。

『脳の話』(時実利彦著/岩波書店)を読むと、赤ちゃんの脳細胞は1年でものすごく成長するって書いてあって、その通りなんだってわかります。本から得たことばが、赤ちゃんに大きな影響を与えています。赤ちゃんが何かをできるようになった時って本人もうれしいし、まわりもうれしい。そんな姿を見られるのは、本当に幸せなことです。



村の図書館に来館したときも、さっそく絵本を読んでもらっていました。

ブックスタート20周年

日本に導入されたのとはほぼ同時期に、下條村でもブックスタートが始まりました。平成 13(2001)年5月、村民センターにて、飯田・下伊那地域では最も早い開始でした。

これまで776人が、絵本2冊をプレゼントされ、親子で絵本を楽しむひと時を過ごし大きくなりました。いちばん最初に絵本をプレゼントされた“あの日のあかちゃん”は、いま二十歳になりました。

絵本は、大人が子どもに読んであげる本です。

どんな時代にも、子どもは、まわりの大人からたくさんの愛情をもらって(⇒心の成長)、大きくなります。愛情をかけるって？やさしくなでてあげたり(スキンシップ)、わらべうたであそんだり、「いい子だね」「すごいね。できたね!」「あなたがいてくれてうれしい」等…ことばをかけてあげること、歌ってあげること、絵本をよんであげること。そして“**赤ちゃんがよるこぶことを、してあげること**”です。赤ちゃんが感じた喜びは、子どもの心のなかに「よいもの」として蓄積されていきます。

7～8 か月児相談でのブックスタート事業



2022. 1. 13 いきいきらんど。この日の対象は3人の赤ちゃんとお母さん。おすすめ絵本5冊(0～3歳向け)の中から2冊を選びます。



2022. 3. 3 この日も3人のあかちゃんが対象でした。2歳のお姉ちゃんも、一緒に絵本を聞いたり、わらべうたを楽しみました。

ブックスタートのこのごろのようす



この日、男の子とお母さんが選んだのは、『たまごのあかちゃん』と『くつついた』でした。

【ブックスタートで行っていること】

- ◇ みなさんにおはなし(絵本を読んであげることは、赤ちゃんの心の成長につながります)
- ◇ 絵本2～3冊を読み、わらべうたを1つ
- ◇ ご家族におはなし(絵本リストなど資料の説明、絵本を2冊選び)&バックに入れてプレゼント

インターネット予約をご利用ください

ご自宅のパソコンやスマホ等で資料の予約ができます。図書館のホームページから本・雑誌・DVDを検索して貸出状況を確認し、予約を入れることができます。資料検索で資料を確定⇒予約申請をクリック⇒利用者番号とパスワード入力⇒終了。ご用意ができましたら、連絡メールが届きます。＊メールアドレスとパスワードの登録が必要です。登録時のパスワードを忘れてしまった方は、お問い合わせください。

新刊 ぴくあっぷ



「奏鳴曲 北里と鷗外」海堂尊著 文藝春秋／ドイツ留学を経て、ペスト菌を発見し、“日本の細菌学の父”の異名を持つ北里柴三郎。同時期にドイツで学び、軍医総監にまで上り詰めた森鷗外。感染症との終わりなき闘いに挑んだ2人の医師の「栄光」と「蹉跎」を描く。*F力



「タラント」角田光代著 中央公論社／周囲の人々が“意義ある仕事”に邁進する中、心に深傷を負い、無気力な中年になったみのり。不登校の甥の手で、心にふたをした義足の祖父の過去が緋かれるとき、みのりの心は…。*F力



「はじめての」島本理生ほか著 実業之日本社／テーマは「はじめて〇〇したときに読む物語」。島本理生、辻村深月、宮部みゆき、森絵都の4人の直木賞作家と、“小説を音楽にする”ユニット・YOASOBIのコラボレーションからうまれたアンソロジー。*Fハ



「まるありがとう」養老孟子著 西日本出版社／まるがいなくなって、ほぼ1年になる。ボンと頭を叩いて、「バカ」というと、少し迷惑そうな顔で薄目を開ける。それができなくなったのが残念である。養老孟子が愛猫「まる」の思い出を語る。「まる」の写真も多数収録。*645ヨ



「心をととのえるスヌーピー」チャールズ・M・シュルツ原著 谷川俊太郎訳 光文社／「ピーナッツ」に登場するキャラクターのセリフには、禅語と重なる部分が多々見られる。無言でも、そこには禅語に通じる世界が広がっている。禅で「ピーナッツ」の世界を読み解く。*188コ



「ないものねだるな」阿川佐和子著 中央公論社／コロナ禍で激変した生活、母亡き後の実家の片づけ、忍び寄る老化現象…。「なんのこれしき」と奮闘の日々を綴った、アガワ流「あるもので乗り越える」人生のコツ。『婦人公論』連載から41編を選んで単行本化。*914ア



「大関御嶽海」信濃毎日新聞社／2022年1月、長野県上松町出身の御嶽海関が大関に昇進。3度目の優勝を飾った初場所含めた直近3場所の取組詳細、初土俵からの全戦績と番付一覧などを収録する。『信濃毎日新聞』掲載の記事や写真を基に再構成。*788ミ



「妄想美術館」原田マハ ヤマザキマリ著 SBクリエイティブ／ルネサンス、印象派、現代アート…。アートを溺愛する作家と漫画家が、名画にまつわる裏話、お気に入りの美術館、絵画鑑賞の秘訣、画家たちの知られざるエピソードなどを語る。*720ハ



「里山のシイナのほぼ片づけ日記」里山のシイナ著 PHP研究所／田舎暮らし系YouTuberである30代夫婦が、田舎の古民家を購入し、前の住人の膨大な生活用品を、ただひたすらに片づけていった約1年半の日々を、四季折々の里山の風景や気ままな生き物たちの姿とともに紹介する。*527サ



「ハギレのレシピ」小さなハギレから作り出すかわいい＆便利な小物たちの時間」ブティック社／リボン付きがま口、ヘアアイロンホルダー、コスメツールケース、ティーカップピンククッション…。ハギレで作る、かわいくて便利な小物を紹介します。*594ハ



「プロに教わる野菜の収穫・保存・加工の技とコツ 大量消費レシピ付」やさい畑ファーマーズクラブ著 河出書房新社／野菜を最もおいしい状態で収穫する農家の技とコツを伝授する。たくさん収穫した時に使える、鮮度を失わずに保存する方法や大量消費できる料理レシピなど、長くおいしく食べるための方法も紹介。『やさい畑』掲載を書籍化。*626フ



「子どもから話したくなる「かぞくかいぎ」の秘密 一生ものの対話力を磨く」玉居子泰子著 白夜書房／最近夫婦で話せていない、もっと子どもの気持ちを知りたい、わかってあげられたい…。そんな悩みを解決する「かぞくかいぎ」を開いてみませんか？「かぞくかいぎ」のコツと、7つの家族の実例を紹介します。*379タ